

## 第二回入学試験問題

【国語】 時間 45分

### 【校長からのメッセージ】

おはようございます。まず、左の【注意】をていねいに読んでください。  
今日までよくがんばってきました。

これから鷗友学園の入学試験が始まります。

今まで応援してくださった多くの方々を思い、自分のエネルギーにして  
取り組んでください。

試験の開始までもう少し。

深呼吸して気持ちを落ち着かせて待ってください。

### 【注意】

- 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
- 2 問題用紙は、全部で11ページあります。試験中によごれや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生を呼んでください。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさまれています。
- 4 問いに字数指定がある場合には、最初のマス目から書き始めてください。なお、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今から三十二年前の東京大空襲の夜である。

当時、私は(注1)女学校の三年生だった。

軍需工場に動員され、旋盤工として風船爆弾の部品を作っていたのだが、栄養が悪かったせいか脚気にかかり、終戦の年はうちにあった。

空襲も昼間の場合は艦載機が一機か二機で、偵察だけと判っていたから、のんびりしたものだ。空襲警報のサイレンが鳴ると、飼猫のクロが仔猫をくわえてどこかへ姿を消す。それを見てから、ゆつくりと本を抱えて庭に掘った防空壕へもぐるのである。

本は古本屋で買った「スタア」と婦人雑誌の附録の料理の本であった。クラーク・ゲイブルやクロードット・コルベールの白亜の邸宅の写真に溜息をついた。

私はいっぱしの軍国少女で、「鬼畜米英」と叫んでいたのに、聖林だけは敵性国家ではないような気がしていた。シモーヌ・シモンという猫みたいな女優が黒い光る服を着て、爪先をブツリ切った不思議な形の靴をはいた写真は、組んだ脚の形まで覚えてる。

料理の本は、口絵を見ながら、今日はこれとこれにしようと思つたつもりになったり、材料のあてもないのに、作り方を繰返し読みふけた。頭の中で、さまざまな料理を作り、食べていたのだ。

「コキール」「フーカデン」などの食べたことのない料理の名前と作り方を覚えたのも、防空壕の中である。

「シユー・クレーム」の頂きかた、というのがあって、思わず唾をのんだら、

「淑女は人前でシユー・クレームなど召し上ってはなりません」

とあって、がっかりしたこともあった。

三月十日。

その日、私は昼間、蒲田に住んでいた級友に誘われて潮干狩りに行っている。

寝入りばなを警報で起された時、私は暗闇の中で、昼間採ってきた蛤や浅蜷を持って逃げ出そうとして、父にしたたか突きとばされた。

「馬鹿！ そんなもの捨ててしまえ」

台所いっばいに、蛤と浅蜷が散らばった。

それが、その夜の修羅場の皮切りで、おもてへ出たら、もう下町の空が真赤になっていた。我家は目黒の祐天寺のそばだった  
が、すぐ目と鼻のそば屋が焼夷弾の直撃で、一瞬にして燃え上った。

父は隣組の役員をしていたので逃げるわけにはいかなかったのだろう、母と私には残って家を守れといい、中学一年の弟と八歳の妹には、競馬場あとの空地に逃げるよう指示した。

駆け出そうとする弟と妹を呼びとめた父は、白麻の夏布団を防火用水に浸し、たつぷりと水を吸わせたものを二人の頭のせ、叱りつけるようにして追い立てた。この夏掛けは水色で縁を取り秋草を描いた品のいいもので、私は気に入っていたので、「あ、惜しい」と思ったが、さっきの蛤や浅蜷のことがあるので口には出さなかった。

だが、そのうちに夏布団や浅蜷どころではなくなった。「スタア」や料理の本なんぞといっではいられなくなってきた。火が迫ってきたのである。

「空襲」

この日本語は一体誰がつけたのか知らないが、まさに空から襲うのだ。真赤な空に黒いB29。その頃はまだ怪獣ということばはなかったが、繰り返し執拗に襲う飛行機は、巨大な鳥に見えた。

家の前の通りを、リヤカーを引き荷物を背負い、家族の手を引いた人達が避難して行ったが、次々に上る火の手に、荷を捨ててゆく人もあった。通り過ぎたあとに大八車が一台残っていた。その上におばあさんが一人、チョコンと坐って置き去りにされていた。父が近寄った時、その人は黙って涙を流していた。

炎の中からは、犬の吠え声が聞えた。

飼犬は供出するよういわれていたが、こっそり飼っている家もあった。連れて逃げるわけにはゆかず、繋いだままだったの

だろう。犬とは思えない凄まじいケダモノの声は間もなく聞えなくなった。

火の勢いにつれてゴオツと凄まじい風が起り、葉書大の火の粉が飛んでくる。空気は熱く乾いて、息をすると、のどや鼻がヒリヒリした。今でいえばサウナに入ったようなものである。

乾き切った生垣を、火のついたネズミが駆け廻るように、火が走る。水を浸した火叩きで叩き廻りながら、うちの中も見廻らなくてはならない。

①「かまわないから土足で上れ！」

父が叫んだ。

私は生れて初めて靴をはいたまま畳の上を歩いた。

「このまま死ぬのかも知れないな」

と思いつながら、泥足で畳を汚すことを面白がっている気持ちも少しあったような気がする。

こういう時、女は男より思い切りがいいのだろうか。父が、自分でいっておきながら爪先立ちのような半端な感じで歩いているのに引きかえ、母は、あれはどういうつもりだったのか、一番気に入っていた松葉の模様の大島の上にモンペをはき、いつもの運動靴ではなく父のコードバンの靴をはいて、縦横に走り廻り、盛大に畳を汚していた。母も私と同じ気持だったのかも知れない。

三方を火に囲まれ、もはやこれまでという時に、どうしたわけか急に風向きが変わり、夜が明けたら、我が隣組だけが嘘のように焼け残っていた。私は顔中煤だらけで、まつ毛が焼けて無くなっていった。

大八車の主が戻ってきた。父が母親を捨てた息子の胸倉を取り小突き廻している。そこへ弟と妹が帰ってきた。

両方とも危い命を拾ったのだから、感激の親子対面劇があったわけだが、不思議に記憶がない。覚えてるのは、弟と妹が救急袋の乾パンを全部食べてしまったことである。うちの方面は全滅したと聞き、お父さんに叱られる心配はないと思って食べたのだという。

孤児になったという実感はなく、おなかいっぱい乾パンが食べられて嬉しかった、とあとで妹は話していた。

さて、このあとが大変で、絨毯爆撃がいわれていたこともあり、父は、この分でゆくと次は必ずやられる。最後にうまいものを食べて死のうじやないかといいい出した。

母は取っておきの白米を釜かまいっぱい炊たき上げた。私は埋うめてあつたさつまいもを掘ほり出し、これも取っておきのうどん粉と胡麻油まごあぶらで、精進揚しんじんあぶをこしらえた。格別の闇ルートのない庶民しよみんには、これでも魂たましいの飛ぶようなご馳走ちしうだった。

昨夜の名残りなごで、ドロドロに汚れた畳の上じようの上にうすべりを敷しき、泥人形どろにんがたのようなおやこ五人が車座くるまざになつて食べた。あたりには、昨夜の余燼よじんがくすぶつていた。

わが家の隣となりは外科の医院げいかで、かつぎ込まれた負傷者も多く、息を引き取つた遺体いしもあつた筈はずだ。被災ひさいした隣り近所きんじよのことを思えば、昼日中から、天ぶらの匂においなどさせて不謹慎ふきんしんのきわみだが、父は、そうしなくてははいられなかったのだと思う。

母はひどく笑い上戸じやうじになつていたし、日頃は怒りっぽい父が妙みまうにやさしかった。

「もつと食べる。まだ食べられるだろ」

おなかいっぱい食べてから、おやこ五人が河岸かしのマグロのようにならんで昼寝をした。

畳の目には泥がしみ込み、藨草いぐさが切れてささくれ立っていた。そつと起き出して雑巾ぞうきんで拭ふこうとする母を、父は低い声で叱なつた。

「掃除そうじなんかよせ。お前も寝ろ」

父は泣いているように見えた。

自分の家を土足どしはで汚し、年端もゆかぬ子供たちを飢うえたまま死なすのが、家長として父として無念むねんだったに違ちがいない。それも一人人ではどう頑張がんばつても頑張がんばりようもないことが口惜くやくしかったに違ちがいない。

学童疎開がくどうそかいで甲府こうふにいる上の妹いもうとのことも考えたことだろう。一人だけでも助かってよかつたと思つたか、死なばもろとも、なぜ、出したのかと悔くやんだのか。

部屋すみの隅すみに、前の日に私がとつてきた蛤はまぐしや浅蜷あさなが、割れて、干ひからびて転がっていた。

戦争。

家族。

ふたつの言葉を結びつけると、私にはこの日の、みじめで滑稽こっけいな最後(注4)の昼餐ちゆうさんが、さつまいもの天ぶらが浮うかんでくるのである。

はなしがあとさきになるが、私は小学校三年生の時に病気をした。肺門淋巴腺炎りんばせんえんという小児結核しょうけつかくのごく初期である。病名が決った日からは、父は煙草を断った。

長期入院。山と海への転地。

「華族様の娘ではあるまいし」

親戚からかげ口を利かれる程だった。

家を買うための貯金を私の医療費に使ってしまったという徹底ぶりだった。

父の禁煙は、私が二百八十日ぶりに登校するまでつづいた。

広尾の日赤病院に通院していた頃、母はよく私を連れて鰻屋うなぎやへ行った。病院のそばの小さな店で、どういうわけか客はいつも私達だけだった。

隅のテーブルに向い合って坐ると、母は鰻井うなぎどんを一人前注文する。肝焼きもやきがつくこともあった。鰻は母も好物だが、

「お母さんはおなかの具合がよくないから」

「油ものは欲しくないから」

口実はその日によっていろいろだったが、つまりは、それだけのゆとりがなかったのだろう。

保険会社の安サラリーマンのくせに外面のいい父。親戚には気前のいいしゅうとめ。そして四人の育ち盛りの子供たちである。この鰻井だって、縫物のよそ仕事をして貯めた母のへそくりに決っている。③私は病院を出て母の足が鰻屋に向うと、気が

重くなった。

鰻は私も好物である。だが、小学校三年で、多少ませたところもあつたから、小説などで肺病というものがどんな病気かおぼろげに見当はついていた。

今は治っても、年頃になったら発病して、やせ細り血を吐いて死ぬのだ、という思いがあつた。

少し美人になったような気もした。鰻はおいしいが肺病は甘くもの悲しい。

おばあちゃんや弟妹達に内緒で一人だけ食べるといふのも、嬉しいのだがうしろめたい。

どんなに好きなものでも、気持が晴れなければおいしくないことを教えられたのは、この鰻屋だったような気もするし、反対に、多少気持はふさいでも、おいしいものはやっぱりおいしいと思つたような気もする。どちらにしても、食べものの味と人生

の味とふたつの味わいがあるということを知ったということだろうか。

今でも、昔風のそば屋などに入って鏡があると、ふっとあの日のことを考えることがある。

暗い臘脂のビロードのシヨールで衿元をかき合わせるようにしながら、私の食べるのを見るときもよく見ていた母の姿が見えてくる。その前に、セーラー服の上に濃いねずみ色と赤の編み込み模様の厚地のバルキー・セーターを重ね着した、やせて目玉の大きい女の子が坐っていて、それが私である。母はやつと三十だった。髪もたっぷりとあり、下ぶくれの顔は、今の末の妹そっくりである。赤黄色いタングステンの電球は白っぽい蛍光灯に変わり、鏡の中にかつての日の母と私に似たおやこを見つげようと思っても、たまさか入ってくるおやこ連れは、みな明るくアツケラカンとしているのである。

母の鰻井のおかげか、父の煙草断ちのご利益か、胸の病の方は再発せず今日に至っている。

空襲の方も、ヤケツバチの最後の昼餐の次の日から、B 29は東京よりも中小都市を狙いはじめ、危いところで命拾いをした形になった。

それにしても、人一倍食いしん坊で、まあ人並みにおいしいものも頂いているつもりだが、さて④心に残る「ごはん」を指を折ってみると、第一に、東京大空襲の翌日の最後の昼餐。第二が、気がねしいしい食べた鰻井なのだから、我ながら何たる貧乏性かとおかしくなる。

おいしいなあ、幸せだなあ、と思って食べたごはんも何回かあったような気もするが、その時は心にしみても、ふわっと溶けてしまつて不思議にあとに残らない。

釣針の「カエリ」のように、楽しいだけではなく、甘い中に苦みがあり、しょっぱい涙の味がして、もうひとつ生き死にかかわりのあったこのふたつの「ごはん」が、どうしても思い出にひっかかってくるのである。

(向田邦子「ごはん」『向田邦子ベスト・エッセイ』より)

(注1) 女学校の三年生……現在の十四、五歳にあたる。

(注2) 隣組……戦時中に数軒を一つのグループとした地域組織のこと。主に配給や防火訓練を一緒に行った。

(注3) 余燼……燃え残った火

(注4) 昼餐……昼食

問一 — 線部①「かまわないから土足で上れ！」とありますが、父がどのように言ったのはなぜですか、説明しなさい。

問二 — 線部②「父は、そうしなくてはいらなかった」とは、どのようなことですか。筆者が考える父の心情をふくめて説明しなさい。

問三 — 線部③「私は病院を出て母の足が鰻屋に向うと、気が重くなった」とありますが、それはなぜですか。この時の心情をふくめて説明しなさい。

問四 — 線部④「心に残る『ごはん』をと指を折ってみると、第一に、東京大空襲の翌日の最後の昼餐。第二が、気がねしいしい食べた鰻井なのだ」とありますが、なぜこの二つが心に残っているのですか、説明しなさい。



## 二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

では、① 今の社会は「個を尊重する社会」と言えるでしょうか。私たちが、拘束力が強く閉鎖的な集団を脱し、「一人」になることを求めた理由の奥底には、「集団ではなく個を尊重したい」という願望がありました。

たしかに、かつての社会より、多様な主義や信念は尊重されるようになりました。性的指向については、多様性に配慮する方向で変化が進んでいます。一〇年前であれば、性的マイノリティを表す「LGBTQ」などといっても何のことか分からない人も多かったでしょう。

一九八〇年代であれば、結婚をしない人生を貫き通すことはけっこう大変だったかもしれません。結婚しない人に「一人前ではない」と厳しい言葉が投げかけられたり、昇進で差別されたりすることもありました。そう考えると、私たちは「個を尊重する社会」に生きているように感じます。

しかし、何でも自由に言えるようになったかという点、そうでもない気もします。たとえば、友人であっても気を遣って、なかなか深い話ができない、ということはないでしょうか。会社で管理職に就いている人であれば、「今は何でもハラスメントにされてしまうから、部下とどう接したらいいかわからない」という人もいるでしょう。

「個を尊重する社会」というのは、一人ひとりがそれぞれに独立した意見を持ち、それを率直にぶつけられる社会という意味合いもありました。誰もが、気を遣いつつも、率直に意見をぶつけ合うことで、よりよい社会を築いていく。そういった対話のある社会が目指されてきたのです。

果たしてそういった社会は実現できたのでしょうか。世の中を見渡してみると、実際に到来したのは、目の前の他者に対して意見や批判をすることを憚り、それぞれが自分の殻に閉じこもる社会、あるいは、検索をつうじて、互いに意見の合致している人のみが結びつき、意見の合わない人は寄せ付けない分断型の社会ではないかと思うこともあります。そこからは、個を尊重する姿勢を読み取ることはできません。

では、なぜこのようなことが起きてしまったのでしょうか。この謎を読み解く鍵として、本書では「人それぞれ」という言葉に着目します。

個人化と「人それぞれ」に強い親和性があるように、「人それぞれの社会」と「個を尊重する社会」は、じつは非常に近い位置にあります。② というのも、「個を尊重」したからこそ、「人それぞれ」に陥おとってしまふ、ということがたびたびあるからです。詳しくみていきましょう。

「個を尊重する社会」とは、個々人の選択せんたくや決定を尊重する社会です。「一人」の生活の浸透しんとうとともに、生活のさまざまな面で、個人の希望や選択がとりわけ重視されるようになりました。私たちは、集団ではなく自らの意思にしたがって、なんらかの行動を起こすことができるようになったのです。

このような社会では、いわゆる「べき論」を使って、相手の行為こういや主義・信条に申し立てをすることはあまりできません。具体的に言うと、「男性ならばこうあるべき」、「部下ならばこうあるべき」などといった形で、なんらかのカテゴリーを持ち出して他者に意見をすることは、こんにちでは容易ではないのです。皆さんも思い当たるのではないでしょうか。他者が表出した意見や行動は、いったん受け止めるというのが、個を尊重する社会の流儀りゆうぎなのです。

このように、個人の希望や選択が重視されるようになると、誰かの希望や選択に対して、否定的な意見をなかなか言い出せなくなります。というのも、相手の考えを否定する行為は、「相手の考えや行動を尊重しない行為」と解釈かいしゃくされかねないからです。だからこそ私たちは、相手の考え方や行動を否定しないよう細心の注意を払はらいます。

このような傾向けいこうは、若者の友人関係に顕著けんちやくに表れています。日本では、一九八〇年代から、友人と深く関わろうとせず、互いに傷つけ合わずに、場を円滑えんかつにやり過ごすことに重きをおく友人関係が目立つようになりました。土井隆義どいたかよしさんはこのような友人関係を、お互いの感覚のみに依拠いきよし、相手を傷つけないよう過剰かじょうに配慮する「優しい関係」と表現しています。場を円滑にやり過ごすには、相手を否定しない、あるいは、傷つけないコミュニケーションの技法が有効なのです。

とはいえ、「否定しない」というのは、そう簡単にできることではありません。もちろん、明確な否定表現や中傷表現は避け、「べき論」は避けるといった形で、簡単な予防は可能です。しかし、相手を否定したかどうかの判定は、多くのコミュニケーションにおいて、曖昧あいまいな領域に留め置かれたままです。というのも、なんらかの表現に対する否定判定は、結局のところ、発

せられた言葉や行動を受け止める相手の気持ちにゆだねられているからです。

たとえば、友だちから進路についての相談を受けたとしましょう。このとき、友だちの話す進路について「あまりよくない」と思ったとしても、それを伝えるのは容易ではありません。伝え方によっては、相手に「自分のことを否定された」と思われるかもしれないからです。もっと簡単な例で言うと、相手を褒めたつもりだったのに、反対の受け取られ方をする、ということは珍しくないでしょう。

このような状況は、私たちに非常に厄介な課題を突きつけます。私たちは、コミュニケーションの正解が見えないなか、相手の感情を損なう表現を避けつつ、その場を穏便にやり過ごすよう求められているのです。このような場で重宝されるのが「人それぞれ」という表現、または立ち位置です。「人それぞれ」という言葉は、相手の意向を損なわずに受容するという難題に対して、最適解を提供してくれます。

相手の考え方に違和感をもったとしても、「人それぞれ」と言っておけば、ひとまず対立を回避して、その場を取り繕うことができます。「べき論」を使って、規範を押しつけてくる人よりも、「人それぞれ」と言って、相手を受け入れてくれる人のほうが好まれるでしょう。私たちは「人それぞれ」という言葉を使うことで、さまざまな場を穏便にやり過ごしているのです。

（石田光規『「人それぞれ」がさみしい』）

問一 —— 線部① 「今の社会は『個を尊重する社会』と言えるでしょうか」とありますが、ここでの「個を尊重する社会」とはどのようなものですか。六十字以内で説明しなさい。

問二 —— 線部② 『「個を尊重」したからこそ、『人それぞれ』に陥ってしまう』とありますが、それはなぜですか、説明しなさい。

三

次の各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) マイキヨにいとまがない。
- (2) あの人はブアイソウだ。
- (3) フルってご参加ください。
- (4) ヒルイのないほど美しい景色。
- (5) メイロウカイクツな人がらだ。

